

ヴォワチュールとタルマン・デ・レオ によるサン＝マル事件¹⁾

田 島 俊 郎

Affaire Cinq-Mars rapportée par Voiture et Tallemant des Réaux

Toshiro TAJIMA

Résumé

Voiture n'est pas un bon témoin de son époque. Dans ses lettres et ses poésies, il ne raconte que rarement des faits historiques. Même pendant son séjour en Espagne en 1632-33, il ne nous révèle pas les secrets diplomatiques entre son maître, Gaston d'Orléans, et le ministre d'Espagne, le duc d'Olivarès. Son tempérament n'était pas celui d'un auteur réaliste. Sa plume n'était pas faite pour rapporter des faits concrets mais plutôt pour divertir les destinataires avec des compliments et des remerciements. C'est pour cette raison que nous nous étonnons de la description détaillée, qu'il nous a laissée de l'arrestation de Cinq-Mars.

1) ヴィニーにこの事件に取材した *Cinq-Mars* と題する歴史小説がある。このロマン派の詩人は、小説の第2部冒頭で、作家の自由を宣言している。「[[シェイクスピアの] 天才は持ち合わせなくともその権利は行使して、三単一に安住せず (中略) 200里の空間、2年の年月を飛び越えよう。」(Nous allons user des mêmes droits sans avoir le même génie; nous ne voulons pas nous asseoir plus que lui (Shakespeare) sur le trépied des unités et, (...) nous passerons tout à coup l'espace de deux cents lieux et le temps de deux années. (VIGNY., p. 241.)) ヴィニーは現実の人物や出来事を自由に配置し、潤色を加えて小説世界を作り上げる。たとえばマリオン・ド・ロルムの館で、スキュデリー嬢の『恋愛地図』(Carte de Tendre)を見たモリエールが『才女気取り』(Les Précieuses Ridicules)を構想したとする (*ibid*, p.344.)。このエピソードは愛嬌としても、1639年に始まるこの物語の冒頭の大事件が、実際には1634年に行われたルーダンの悪魔憑き事件のウルバン・グランディエ処刑であるのは、いささか小説家の自由の濫用ではないか。この時代錯誤は、主人公サン＝マルの処刑を殉教と思わせるための仕掛けなのだろう。つまり創作の都合に歴史的事実をあわせているのである。

なお、本論の引用文のうち [] 内は田島による補注である。

En 1642, la révélation d'un complot a ébranlé la cour de Louis XIII qui séjournait à Narbonne. Cinq-Mars, favoris du roi, avait voulu chasser Richelieu avec l'appui de l'Espagne.

Voiture a suivi la cour du roi, et a rapporté les derniers moment des conjurés. Nous voulons suivre cette affaire à travers les témoignages de Voiture et de Tallemant des Réaux.

書 簡

ヴォワチュールは1642年2月から南フランスにいて²⁾、パリのメゾン租税裁判所長官 (René de Longueuil, premier président de la Cour des aides) に宛てて当地での事件を伝える。

メゾン租税裁判所長官宛て (未刊)³⁾

1642年6月末、モンフラン

拝啓、私がしばらくの間あなたに手紙を差し上げずにいたとしても、そうし損なったのは怠惰のせいではありません。というのはあなたに対して怠惰など持ちようがありませんし、これほど私が感謝している義務をいくばくかにせよ、し損なうなんてことはできっこないからです。こししばらく陛下のおそばから遠ざかっていたものですから、あなたに伝える確かな情報を持ち合わせて居なかったのです。シャヴィニー (Léon Bouthillier, comte de Chavigny) 氏は枢機卿猊下のもとから国王陛下のもとへ、国王陛下のもとから枢機卿猊下のもとへ何度か往復されました。急行馬車で行き来され、その行程には、非常な煩わしき無しには従うことはできませんでしたので、私はそのご兄弟とベジエとモンペリエで何日かを過ごしました。今はナルボンヌで起こったことについて私と同じくらい情報を得ておいででしょう。それでもいくつか特別なことを申し述べます。というのはあなたがそれらについてお聞きになるときに

2) 1642年2月19日にヴォワチュールはガストン・ドルレアン (Gaston de France, duc d'Orléans, Monsieur) の gentilhomme ordinaire (侍従職) に、1643年7月3日には maître d'hôtel ordinaire du roi (王室執事) に任ぜられる。ただこの任務はすでに1642年から就いて、そのため国王の軍隊に随行していたらしい。(MAGNE, p.226.)

3) 今回言及するヴォワチュールの書簡はいずれも、1850年 UBICINI によって初めて刊行されるまで公刊されていない。

は、私があなたに申し上げること、確かな筋から私が知っていることから、少なくともあなたがお聞きになることが本当のことであると確信なさるでしょうから。

国王陛下がナルボンヌにお着きになった日(原注、6月12日)、陛下は単にここに鉱泉水を摂るだけのためにおいでになったのですが、シャヴィニー氏が陛下と2時間ほど会談なさった後、左馬頭⁴⁾は非常にご心配な様子で入ってこられ、非常に動揺され始めました。その晩はボーモン(Beaumont)氏たちの所にいらしたのですが、そこでたくさんの人々を見つけられました。そこで、知らないもの達がたくさん居る、そのものを厄介払いせぬように頼んだ、と年長者におっしゃいました。夜食の後、シウジャック(Sioujac)という仲間の貴族のもとにいらっしゃいました。この人物は逮捕されて釈放されました。そこにいらしてから、部下の別の貴族に町の城門はもう閉じているかどうか見に行くように命じられました。この人物は自分で行かずに小姓を使いに行って済ませてしまったのです。小姓は閉まっていると伝えました。これは実は正しくなかったのです。というのは、ナルボンヌの城門はいつもは夜の8時に閉まるのですが、この夜は9時半にしか閉まらなかったのです。というのは輜重隊が到着するので、そのために遅らせたのです。左馬頭が使いを送ったのは9時だったのですが、城門はその30分後にしか閉じられなかったのです。それを聞いてかの方は陛下の宿舎の外でお休みになることになり、10時頃、昼間ご自身が身につけていらしたマントを部下の一人に着せて護衛の間を通らせたのです。そこに来合わせたもう一人が、半ば眠っていた護衛たちに「おのおの方、左馬頭様を通られますぞ」と言ったのです。といったわけで、かの方は引きこもった、と皆が思いこみ、どうなっているのか知るために人をよこされていた国王陛下へその旨伝えたのです。かの方の部下たちは、もう横になって眠っていらっしゃると言ったのです。11時頃、かの方を逮捕しにシャロ(Charost)氏がやってきたのです。ところが寝台の幕を引いてもそこには誰も見いだせず、到る所を探した後に、そこにいないと知ったのです。といったわけで、逃げ去ったのだと皆思いこんでおりました。あにはからんや、既に人をやって、馬が残らず居ることに気づき、またド・トゥ氏⁵⁾もナルボンヌにいることから、かの方は町を出ていないと判断したのです。すぐにナルボンヌの国王代官に、誰であろうと城門を開けないように、また一

4) サン＝マールのこと、この官職名については注12)を参照。

5) François Auguste de Thou, 法律家で歴史家の Jacques Auguste de Thou の息子。父の死後、王室図書寮長およびパリ法院議員の職を襲う。

晩中城壁の見回りをさせるよう命令するように人を送りました。ところが左馬頭はシウジャックに、とある宿舎に連れてこられていたのです。そこには非常に貞淑だという噂など持ち合わせようもない姉妹二人がおり、しかもかの方はそのうちの一人と数日前に寝たとも言われております。かの方はそこに一人っきりで、軍靴を脱いで、服を着たまま寝台に横になっておられました。翌朝、全戸の戸主に、大逆罪と死刑の罪名で、そのうちに休んでいるものの名前を述べるように布告されました。娘たちは自分たちだけの時はそれには何も言わなかったのですが、左馬頭にとっては非常に不幸なことに、娘たちの伯父が野から戻り、かの方が自分の家にいることに気づき（というのはその男はかの方を見知っていたのです）、代官にその旨伝えさせました。代官はまもなくやってきました。そしてその代官が言うには、非常に取り乱し、ほとんど見分けがつかないように顔が変わってしまっていた左馬頭を見だし、かの方を逮捕する命を帯びていると伝えました。左馬頭がその命を見たいと言うと、陛下から口頭で受けたもの以外はないと答えたのです。さらに君自身に命令されたのかと尋ねました。それに対してその旨の返事がなされたので、「陛下はよくぞなされた、君はよくぞそれに従われた」と言われました。ここでこれらの言葉を発しながら左馬頭は涙を流し始められたということです。しかしシャヴィニー氏にこの点が真実であるかどうか尋ねたところ、氏は代官はそうは全く言わなかったと言われました。かの方は一昨日モンペリエの城塞に着き、セトン (Céton) によって警護されております。この件について私が聞き、また非常にもっともらしくてほとんど確かな推測によると、かの方は非常に大胆で陰険な計画を持っていた、とこの地では信じられていると思えます。そして他の人たちがこの不幸に巻き込まれはしないか心配しています。そこにいたいと渴望している土地であるパリに近いうちに向かうと思います。

この手紙を書いてしまってから、左馬頭を逮捕した人物にここモンフランで会ったのですが、その人が言うには、翌日かの方に会いに行くと、顔や腹を200発も殴られ、血を吐いていたということです。」(UBICINI, I, p.388-391.)

ヴォワチュールは王弟殿下ガストン・ドルレアンに仕え、宰相リシュリュー (Armand Jean de Plessis, cardinal de Richelieu) や王妃アンヌ・ドートリッ

シュ (Anne d'Auriche) など国家の中枢にいた人々を見知っていた。しかし書簡から見る限り政治的ではない。ガストン・ドルレアンの家臣としての役職上の書簡は残されていないし、職務を離れてガストン・ドルレアンの政治的活動についてコメントする書簡もほとんどない。ガストン・ドルレアンは、王位を窺ったり、リシュリューの打倒を試みて、何度も政治的な陰謀事件に荷担している。そのことごとくに失敗し、何度か亡命の憂き目にあっている。ヴォワチュールも、1632年のモンモランシー (Montmorency) の反乱が失敗したとき、亡命生活を余儀なくされる。ガストン・ドルレアンはブリュッセルへ亡命し、ヴォワチュールはガストン・ドルレアンの代理人の副査という役割でマドリッドに滞在、時のスペイン宰相オリバレス伯 (Don Gaspar de Gusman comte-duc d'Olivarès) の厚遇を受けている。スペイン支配下のブリュッセルに亡命した主人のマドリッドで唯一の代理人なのに、その公務上の書簡は残っていない⁶⁾。

パリを離れた軍人、外交官である友人たちに送られた書簡は多く残るが、その中でも政治的なあるいは時事問題には言及せず、パリの社交界について語る。たとえば、ラ・ロッシュェルやライン地方、イタリアと様々な戦場にあったラ・ヴァレット枢機卿 (Louis de Nogaret de, cardinal de La Valette) や、Münster の講和会議の全権であったダヴォー伯 (Claude de Mesmes, comte d'Avaux) に宛てて、ランブイエ邸の人々の近況など書簡が多く残されている。つまりヴォワチュールは歴史的事件についての証言者としての役割をそれほど果たしていない。ここに訳出した書簡は、ヴォワチュールのほとんど唯一の、歴史的な事件の生々しいルポルタージュである。

ヴォワチュールが近くで見聞し、われわれに伝えるこの事件を再現してみよう。われわれの案内人になってくれるのはヴォワチュールと、『逸話集』の著者タルマン・デ・レオ (Gédéon Tallemant des Réaux) である⁷⁾。彼らの筆遣いの陰から当時の人士の感情、息づかいが窺えれば幸いである。

6) 田島 (1990) 参照。

7) タルマン・デ・レオは1657年から *Historiettes* の執筆を開始する。1659年以降の出来事は原稿の余白に追記する形で書き込まれており、この年には書き終えたように思われる。(TALLEMANT DES REAUX, I, *Introduction*) したがって、ヴォワチュールの書簡は同時代の証言であるが、タルマンの記述はおよそ15年後以降にまとめられたものである。

時 代

ルイ13世と宰相リシュリューの時代は、ほぼ「三十年戦争 (guerre de trente ans)」と重なる。まさに遠交近攻の時代であり、隣国をいかに強大にしないかが各国の外交政策の原則であった。フランスにとっては、神聖ローマ帝国内でハプスブルグ家の勢力をいかに分断するか、が外交目標であった。敵国の内憂は自国の利益であり、各国は敵国の反体制勢力の反乱を促し、分離独立派を支援する。リシュリューは、国内では新教徒を圧迫しながら、対外的には、旧教陣営に属するはずの、スペイン、オーストリア、フランドル地方を領するハプスブルグ家と対抗する。そのために帝国内の新教派諸侯を支援する。戦争の前半、フランスはスウェーデン王グスタフ・アドルフと同盟し、ドイツを戦争状態にとどめようとする⁸⁾。逆に、フランス国内の内憂には外国勢力が支援の手をさしのべる。1627年、包囲されたラ・ロッシュェルの新教徒にはイギリスのバッキンガム公爵が支援を送り、1632年、モンモランシー公爵の反乱の黒幕はスペインのオリバレス伯爵であった。

1635年、スウェーデン王の死後、フランスは戦争に直接介入する。スペインとの戦いはフランドル、フランシュ＝コンテ、ピレネーの三方面で戦われた。フランドルからは、1636年にはスペイン軍はソンム、オワーズ川を遡ってパリに向かうべく、アミアンの近くのコルビーを落とす。パリは恐れおののくが、ガストン・ドルレアンの指揮でコルビーはフランスの手に取り戻される (11月14日)⁹⁾。

ピレネー方面ではペルピニャンを巡って争われた。ルシヨン地方の中心都市ペルピニャンは中世にはマジョルカ王国の首都であった。14世紀にはカタロニア公国として独立し、公国内ではバルセロナに次ぐ重要な都市として栄えた。1463年ルイ11世はカタロニア公国と争うアラゴン王国を支援し、フランスは代価としてペルピニャンを含むルシヨン地方を得る。しかしカタロニアへの帰属意識が強い人々はフランスの支配に対しては敵対的であった。1493年、ルイ11世の子シャルル8世は、イタリアでの軍事行動の必要上スペインとの友好を希

8) 同盟国の王の名前はヴォワチュールたちには親しいものだったようで、1632年の3月には、ジュリー・ダンジェンヌに宛てグスタフアドルフを装った手紙がある。(UBICINI, I, p.73-75.)

9) この事件についてはヴォワチュールが書簡と詩で言及している。(UBICINI, I, p. 267-279.) LAFAY 版による作品番号80 (UBICINI 版の52) のリシュリュー擁護のロンドはこの事件の際の際のものだと思われる。田島 (1993) 参照。

望し、ルシヨン地方をスペインに返還する。その150年後、フランスの国境を自然国境に一致させる対外政策を採るリシュリユーにとって、ピレネー山脈のフランス側に存在するスペイン領ルシヨンはフランスに回収されるべき地域となった。1640年カタロニア地方のマドリッドへの反乱を支援してペルピニャンを囲む。

寵 臣

1630年代の後半、二十歳前の青年が出世の階段を駆け上がっていく。1620年生まれのアンリ・コワフィエ、サン＝マル侯爵 (Henry Coiffier, dit Ruzé, marquis de Cinq-Mars, Monsieur le Grand) は、若年ながらリシュリユーに引き立てられた。ルイ13世の治世の初期に元帥、イングランド大使などを務めた父のエフィア元帥が、リシュリユーの重要な取り巻きであったことが厚遇の理由である。サン＝マルは15歳で近衛連隊の大隊長に任ぜられた。

ルイ13世にはその頃オートフォール (Marie de Hautefort) やラ・ファイエット (La Fayette) といった愛人たちがいたが、その影響力が強くなりすぎることを心配したリシュリユーは、それらの女性たちを遠ざけた。¹⁰⁾ その後を埋めるために自分のコントロールが及ぶ人物を物色しており、この美青年に目をつけた。

「ラ・ファイエットをあまり快く思わなかった枢機卿は、王に何らかの楽しみが必要だと考えエフィア元帥の2番目の息子であるサン＝マルに目を留めた。枢機卿は王がすでにこの美しくて容姿端麗な若い貴族にいくばくか心動かされていることに気づいていた。そして枢機卿の取り巻きであった人の息子を探していたのだが、これが他の者よりは枢機卿の意に従うだろうと思った。」 (TALLEMANT DES REAUX, I, p.276.)

「枢機卿猊下は、王に何らかの気晴らしが必要であることをよくご存じで、(中略)もう王にかなり気に入られていたサン＝マルに目を留められた。枢機卿はこの計画をずっと以前から持っており、というのはラ・フォルス侯爵 (La Force) は三年前から国王衣装係の職を退けずにいた

10) 王はオートフォール嬢相手に馬や犬や鳥などの話ばかりしていた (TALLEMANT DES REAUX, I, p.338.)。ラ・ファイエットはリシュリユーに追われ修道女として隠棲する (*ibid.*, p.276.)。

のであるが、枢機卿はサン＝マール以外の誰かがその職を得ることを望んでいなかった。実際、今ではドーモン元帥 (Antoine d'Aumont) となっているヴィルキエ (Villequier) の兄であったドーモン氏 (César, marquis d'Aumont) は王から好意的な言葉をいただいていたにも拘わらず、この職には就けなかった。」(*ibid.*, p.345.)¹¹⁾

1638年3月、リシュリユーの引きで国王衣装係の職を得たサン＝マールは、ルイ13世から寵愛を受け、翌1639年11月15日、大馬寮の長である左馬頭¹²⁾に任じられた。小馬寮の長程度を想定していたリシュリユーにとって、この任命は思いの外の厚遇であって、サン＝マールの野心を疑わせた。バラダス、サン＝シモン¹³⁾といったサン＝マール以前のルイ13世の寵臣たちは小馬寮の長 (Premier Ecuyer du Roi) に任じられていた。サン＝マールはこの職には満足せず、より高位の左馬頭 (Grand Ecuyer de France) を望んだ。

父親が元帥であったにせよ、取り立てて輝かしい経歴があるわけでもない青

11) 同工異曲の話が「ルイ13世」の項 (*ibid.*, p.345-353) と「リシュリユー」の項 (*ibid.*, p.276-290) で繰り返されるが、ADAMによると「ルイ13世」の項が執筆は遅い。「ルイ13世」の項の内、サン＝マール事件に関する部分は原稿の余白への加筆部分であり、その執筆はさらに遅く1659年以降である。

12) ここに馬寮と訳した écurie (厩舎) には Grande Ecurie と Petite Ecurie があった。前者では乗馬用の馬を管理し、後者は馬車、繋駕を管理した。前者の長を Grand Ecuyer de France、後者の長を Premier Ecuyer du Roi と呼んだ。またそれぞれを Monsieur le Grand、Monsieur le Premier と呼び慣わした。Grand Ecuyer de France の職務は、大小の馬寮を統括する本来の任に加えて、祝典の際に王のマントの裾を持つこと、都市に入る際に剣を持って先行すること、王が高等法院を親裁する際、王の右手に侍することなどであった。また Premier Ecuyer du Roi の職務は、王が車馬を乗り降りする時に手を差し出すことであった (FURETIERE、MOUSNIER および G. D. E. L. より)。Grand Ecuyer de France の訳語については手元のいくつかの仏和辞書には主馬頭 (しゅめのかみ) という語が当てられている。ただ日本の公家官制において、主馬寮は平安朝初期を除いて春宮坊 (とうぐうぼう) に属していたようで、太政官に直属していたのは左右の馬寮 (めりょう) であった。したがって Grand Ecuyer de France の訳語には主馬頭より左馬頭 (さまのかみ) の方が近いだろう。また Premier Ecuyer du Roi については仏和辞典には記載がない。大小が中国や日本の左右に対応するとすれば右馬頭 (うまのかみ) だろうが、あえてここでは小馬寮の長と呼ぶ。『広辞苑』等参照。

13) François de Barradas、Claude de Saint-Simon、サン＝シモンは18世紀初頭のモラリストの父。(TALLEMANT DES REAUX, I, p.339-340.)

年が王に寵愛された秘密は、ルイ13世の同性愛的性向にあった。ルイ13世は若い頃から同性愛の指向があり、タルマン・デ・レオはルイ13世が愛情を示した相手として御者の Saint-Amour, 犬係の Haran, Vendosme 大修道院長, Souvray 司令、それに Montpouillan-la-Force といった名前を挙げている¹⁴⁾。またサン＝マールに先立つ寵臣として、バラダス、サン＝シモンがいた¹⁵⁾。

サン＝マール自体は異性愛であり、1年半にわたって王の要求を拒んでいた。タルマン・デ・レオはサン＝マールと交情のあった女性として、後のポーランド王妃、ルイーズ＝マリ・ド・ゴンザーグ (Louise-Marie de Gonzague, princesse Marie, puis reine de Pologne)、マリオン・ド・ロルム (Marion de Lorme)、シェムロ嬢 (Françoise de Barbezière de Chémereault, puis Mme de Bazinière)などを挙げ、それぞれについての逸話を述べる。ルイーズ＝マリ・ド・ゴンザーグは、ヴィニーの小説の中ではサン＝マールの純愛の相手の役割を宛てられている。タルマン・デ・レオによると野心家だったようで、ガストン・ドルレアンとの結婚を目論んだり、サン＝マール事件にも係わっており、リシュリューを追い払った後サン＝マールを宰相の地位につけてその妻になることを考えていたという¹⁶⁾。ユゴーの作品によってわれわれにも記憶されるマリオン・ド・ロルムとの関係については、息子がこの女性と結婚するのではないかと心配したサン＝マールの母親が、高等法院から結婚の禁止を取り付けていた、という話を伝えている¹⁷⁾。またシェムロ嬢に関連して、サン＝マールがどのようにして王の監視役を蒔いて夜の外出を続けたかを語っている¹⁸⁾。

さて、タルマン・デ・レオは王の寵愛の実体を語る。

(前略) フォントライユ¹⁹⁾が言うところには、一度サン＝ジェルマンで左馬頭の部屋へ唐突に入ると、彼が足から頭の先までジャスミンの香油で体を拭いているところにぶつかった。それから寝台に入りながら落ち着きのない声で「これがずっと清潔だからね」と言った。そのすぐ後

14) *ibid.*, p.344.

15) *ibid.*, p.339-340.

16) *ibid.*, p.281.

17) *ibid.*, p.347.

18) *loc. cit.*

19) Louis d'Astarac, vicomte de Fonterailles, 「フォントライユ子爵はラングドック地方の貴族で前、後ろにせむしであり、顔は醜かった。と言って愚かそうではなかった。非常に小柄で太っていた。」(1862年の Montmerqué et Paulin 版の注による) われわれはこの人物にはこの後何度か出会う。

にぶつかった相手は王であった。(中略)

また次のようなことも聞いた。どの旅行の際かは知らないが、王は7時から床に就かれた。非常にだらしない身なりで、どうにかみすぼらしくない²⁰⁾程度であった。二頭の大きな犬が寝台に飛び上がり、何もかもぶちこわしにして、陛下を舐め始めた。王は左馬頭の服を脱がせにやられたが、彼は花嫁のように着飾って戻ってきた。「横になるのだ、横になるのだ」と王は待ちきれずに言われた。そして寝台を整えさせることなく犬を追い払うだけで満足された。そしてこのお気に入りはまだ中に入ってはいなかったが手に口づけされていた。王はこのような熱意の中で、左馬頭の心はよそにあったので、応じるものが少ないのに気づかれ、と言われた。「いったいおまえはどうしたのだ、どうしたいのだ、悲しげではないか。ニエール (Pierre de Niert ou Nière) (原注、王の小姓)、何に怒っているのか尋ねてみよ、言ってみよ、このような寵愛はみたこととはあるまい? ²¹⁾」(ibid., p.346-347.)

最初は王をコントロールするための道具としてリシュリユーが送り込んだサン＝マールだが、王の身辺を報告するという役割をすぐに放棄したために、枢機卿の怒りを買う。また枢機卿は、自分のコントロールを離れて高位を窺うサン＝マールを警戒し、サン＝マールがさらに高位の枢密院のメンバーになることを希望すると反対する。これがサン＝マールを反枢機卿派に追いやり、サン＝マールは枢機卿のスパイを追放するという報復に出る。これで不和は決定的になる。

最初はサン＝マール氏は、踊ったり、健康を祝して飲んだり王にちょっとした楽しみを味あわせた。しかし血気盛んな、自分の楽しみこそを好む青年ではあったので、心ならずも選んでしまった生活にすぐに飽きてしまった。ところがこの人物へのスパイであった王の小姓ラ・シェネ (la Chesnaye) が彼を枢機卿と仲違いさせてしまった。というのはラ＝シェネは枢機卿にあれこれ王の軽薄さ、つまり枢機卿は聞かされたいと

20) 原文では、「à peine avait-il une coiffe à son bonnet」とある。FURETIEREのbonnetの項には、triste comme un bonnet de nuit sans coiffe, à cause qu'un bonnet en cet état est sans ornement et sans propreté.とある。

21) ADAMによれば、この挿話のタルマン・デ・レオのニュースソースはこのニエールだと考えられるので、この話は全くの根拠のない話ではないだろうとのことである。(TALLEMANT DES REAUX, I. p.1021.)

思っていたのに別の人物 [サン＝マール] が全く語らなかった事柄、を述べたからである。サン＝マールは左馬頭とダンマルタン (Dampmartin) 伯爵に任ぜられた際ラ・シェネを追い払わせた、そして同時にこれによって枢機卿と彼の間に宣戦が布告されたのである。(ibid., p.346.)

彼らの不和が爆発し始めたのは、サン＝マールが枢密院にはいることを言い出したときであった。

枢機卿は、王がサン＝マールを小馬寮の長ではなく、左馬頭に任じられたことにも感心しなかった。王はサン＝マールの前でそれを話されたので、彼は事情をすべて承知していた。つまり、枢機卿は王にあらゆる不都合、それに若すぎることを並べ立てた。これが左馬頭を憤慨させ、王の小姓でありリシュリュウのスパイであったラ・シェネを王に手ひどく扱わせ、王は恥ずべきやり方で追い払われた。王はラ・シェネを手ひどく扱いながら「少なくとも奴は貴族ではないからな」と居合わせたものにおっしやった。(ibid., p.276.)

また先にサン＝マールと王の秘め事に出くわしたフォントライユはリシュリュウを憎んでおり、サン＝マールと枢機卿の不仲を煽った、とタルマン・デ・レオは述べる。

枢機卿猥下に対してサン＝マールをもっとも苛立たせたのは明らかにフォントライユである。というのは、この人物は枢機卿に対して怒っていたからである、それはこういうわけである。フォントライユやリュヴィニー²²⁾ や他の者たちがリュエル (Ruel)²³⁾ で枢機卿の部屋の控えの間

22) Henri-Manasses, marquis de Ruigny. サン＝マールはマリオン・ド・ロルムとの色恋沙汰の際、母親の反対に遭い、母の家を出てマレー地区の rue Culture Sainte-Catherine 通り (現在の rue de Sévigné) に、この人物とともに暮らした。(ibid., p.640.)

23) 現在のリュエイユ＝マルメゾン Rueil-Malmaison の古名。ru (小川) という古語が語源だという。http://www.mygale.org/08/jdeheyn/rueil/rueilaupasse.htm 参照。随時変更されるうる Web のページを出典として示すのはふさわしくないかもしれない。ただ、Ruel から Rueil への変遷は常識に属することがらなのか、ADAM は注を付しておらず、また手元の百科事典にも記載がないため、情報源としてははかない Web のページをあえて出典として挙げる。本稿執筆時 (1998年9月) には閲覧可能であった。

にいた。そしてどこの大使かは知らないが退出されるというとき、枢機卿は大使より前に控えの間に出てきて、フォントライユを見つけて。「下がられよフォントライユ殿、大使は怪物はご覧になりたくはないでしょうからな」と言った。フォントライユは歯ぎしりして「ああ、畜生、おまえは俺の胸に短刀を突き刺したな、しかし今度は俺が突き刺してやるぞ。」と自らに言い聞かせた。枢機卿はその後この人物を呼び寄せ、先ほど言ったことを取り繕うために冗談を言ったりしたが、この人物は決して許さなかった。このことばが枢機卿を破滅させかねなかった陰謀を起こさせたのかもしれない。(ibid., p.277.)

1年半もルイ13世の寵愛に応えようとしなかったサン＝マールであり、王ともにあるときも心ここにあらずという風であったのだから、王はサン＝マールを監視させていた。

王は彼が極秘にどこかに行くかどうか知るために監視させていらした。[中略]左馬頭のこの時期最大の想われ人は、今ではバジニエ夫人となっているシェムロ嬢であった。この女性はそのころパリの***で修道女であった。ある晩サン＝マールはリュヴィニーにサン＝ジェルマンで出会って言った。「僕について来たまえ、シェムロに話しに行かなければならないんだ。堀の中に僕が通ると知らせていた場所があって、そこに馬を2頭待たせているのだ。」彼らは出かけていったが、馬丁は地面に眠りこけており、2頭の馬は盗まれてしまっていた。と言ったわけで左馬頭はがっかりしてしまった。彼らは引き続いて他の馬を探しに町中に出かけていったのだが、遠くから後を付けてくる男に気づいた。それは王が左馬頭を監視させている最大のスパイである近衛軽騎兵であった。左馬頭はその男と気づき呼んで話しかけた。この男は彼らが殴り合う[のを警戒して近づかない]のだと思わせようとした。彼は否と言い張ったが、結局この男は去ってしまった。リュヴィニーは左馬頭に対して次のように提案した。王をいらだたせるのではないかと心配なので戻って、休んではどうか、それから2時間たって、眠れないので王室衣装係の士官に話しに来るように頼みに人をやれば、彼のスパイたちへの[王の]信頼を取り除けるだろう、というのは彼が外出したと、翌日には必ず王に報告されるに違いないから。左馬頭はこの忠告を信じた。翌日王は「そちは昨夜はパリにいたのだな」と言われた。彼が目撃者を作ったのである。

スパイは混乱してしまって、彼はパリの中を3度も夜の散歩に出かけるほどの余裕を得たのである。(ibid., p.347-348.)

不遜で役に立たなくなったサン＝マールとリシュリユーは戦争状態にありそれぞれが互いに追い落とそうとしていた。タルマン・デ・レオは枢機卿側からの攻撃を三つ伝えている。

[1641年の待降節の頃、ブレゼ提督 (Jean Armand de Maillé-Brézé) は、伯父でもあるリシュリユーから、スペインによるペルピニャン救援軍派遣を牽制すべく、ブレストから艦隊をバルセロナ沖へ回航するように指示を受けた。] 数日後、ブレゼ侯爵はリュエルで王の部屋へ入った。門衛がこの人物に2度以上ノックさせなかったとお考えあれ。王と左馬頭が寝台の奥で話していた。ブレゼは姿を見られずに、左馬頭がリシュリユーを悪し様に言うのを聞いた。彼は退出し、考えた。まだ22歳にもならず、信じてもらえないだろうと恐れた。そこで狩りに出かける王に可能な限り従い、もし左馬頭が一人きりでいればその手で剣にかけようと決心する。一度、そのような左馬頭を見かけるが、犬が近づくのを見て、その後に人間がついてくるだろうと思った。翌日リシュリユーは、さらに翌日には出発するように命じた。彼は部下を働かせながら2日間隠れて過ごした。枢機卿猊下はそれを知り、彼を捜し出して手ひどく非難した。ついにこの若者はどうすればよいかわからなくなり、ノワイエ (François Sublet, seigneur de Noyers) に会いに行き、聞いたことをうち明けた。ノワイエは「明日もまだ出発なさるな」と言った。すべてを知らされた枢機卿はブレゼを召喚し、その熱意には感謝し、自分で始末すると伝えて出発させた。

また彼 [サン＝マール] が枢機卿を暗殺するために人を来させたとの噂が流れ、ダンギャン公 (Louis II de Bourbon, duc d'Enghien puis prince de Condé, le Grand Condé) は枢機卿猊下に彼を殺すために手勢を提供した。ピエンヌ侯爵 (Louis de Brouilly, marquis de Piennes) はそれを知り、リュヴィニーに伝え、リュヴィニーは左馬頭に、これを王に申し上げるように奨めた。翌日左馬頭はリュヴィニーに言った。「王は言われたよ、君、私の護衛隊を使い給えとね。」リュヴィニーは左馬頭を正面から見据えて「どうしてそれを使わないのだ、本当のことを言っていないのだな。」と言った。若者は顔を赤らめた。「少なくとも君が怖が

っていないことを見せるために君の仲間の3～4人を連れて大公殿下に会いに行くんだな」と付け加えた。左馬頭は出かけた。ダンギャン公は賭事をやっており、左馬頭を快く迎え、楽しく話し合った。リュヴィニーも同行した。

ラ・モット元帥 (Philippe de la Mothe-Houdancourt) はスペイン軍がペルピニャンに近づくという噂を流させ、それを阻止するという名目で、町から30里のところまで前進した。そして枢機卿に、お役に立つために前進したのであり、お好きなときに彼 [サン＝マール] を取り除き、王の宿営から引き連れて参ることをお約束しよう、[忠誠を]自分自身について保証できるのと同じように保証できる千人の手の者がいると伝えた。枢機卿は元帥の手並みに感嘆したと言い、それ以上進まぬよう伝えた。(ibid., p.279-280.)

こういった状況の中、サン＝マールはガストン・ドルレアン、ブイヨン公爵²⁴⁾、ド・トゥなどと共に謀し、フォントライユの仲介でマドリッドの支援を受け、リシュリユーを追ってガストン・ドルレアンを政権につけ、スペインと和解するというクーデター密約を結んだとされる。

逮 捕

サン＝マールの不遜さはリシュリユーだけでなく遅かれ早かれルイ13世の心も離れさせていく。性的なものに限らずサン＝マールの嗜好と王のそれは一致せず、サン＝マールは楽しまなかった。「王は左馬頭が嫌うものすべてを好み、左馬頭は王が好むものすべてを憎んだ。彼らは一つの点においてしか一致しなかった。すなわち枢機卿を憎むことである。」(ibid., p.348.)

「枢機卿はサン＝マールを追放したがっていたが、王は、枢機卿がそれを望

24) Frédéric Maruice de la Tour d'Auvergne, duc de Bouillon (1605-1652) は、スペイン領フランドルと国境を接し、フランスからは半ば独立していた大公領であるスダンを領していた。最初プロテスタントとして育ちマーストリヒト代官をつとめる。その後妻の影響でカトリックに改宗し(1635)、元帥としてフランスに仕えるようになる。1637年オランダでの職務を失い、1641年ソワッソン伯(Louis de Bourbon, comte de Soisson) と反リシュリユーの謀議に参加するが破れるが、ルイ13世に罪を免じられていた。

んでいたからこそ追放しなかった。まだサン＝マールを好んでいたからというわけではなかった。」(ibid., p.280.)したがって王の庇護がなくなればサン＝マールの立場はすぐに不安定になることは明らかであった。そういった中でサン＝マールは王と決裂する。

「王の前で要塞の強化について話し合う中でサン＝マールはファベール (Abraham Fabert) と議論していた。王は「見たこともない君が経験のある人物と争おうというのは間違っている」と言い、サン＝マールは激昂し「陛下は今おっしゃったことを私に言わずにお済ませにもなられましたでしょうに」と愚かにも言ったので王は怒ってしまわれた。サン＝マールは退出する際「ありがたいぞファベール殿」とあたかも非難するように言った。「どういうことなのだ、君を脅かしたのか」と王は知りたがられた。「陛下の面前で脅すなどと言うことはありますまい」「ファベール君、6ヶ月前から奴には反吐が出るのだ」(これは王の使ったことばである)(中略)あれほど愛想のないものもいまい。世界一の恩知らずだ。奴は何度か鯨飲馬食して余を何時間も馬車に待たせることがあった。どんな王国も奴の浪費には耐え切れね。奴は今300足も長靴をもっておる。」(ibid., p.281)

またこの箇所へタルマン・デ・レオ自身で次のよう加筆している。

「彼は誤って王と不和になる。それは逮捕の2週間前でしかなかった。ラ・メイユレイ元帥²⁵⁾に対して戦争に関して疑義を申し立てた会話である。王が、何も見ていない君が何年も戦争している人物の争うのはよろしくあるまいと言うと、「陛下、才気と知恵があれば見なくともわかるものです」と答えた。リュヴィニーが(謝罪するように)言えたとしても、王と和解することを投げやりにしていた。スペインとの密約をあてにしていたのである。」(loc.cit.)

1642年5月の状況をヴォワチュールが伝えている。

メゾン租税裁判所長官宛て (未刊)

25) Charles de la Porte, le maréchal de la Meilleraye、この人物はサン＝マールの6歳年長の姉 Marie-Ruzé d'Effiat を妻にしていたことがあるので、サン＝マールにとっては義理の兄とも言える。Marie-Ruzé は1633年に亡くなっている。

ナルボンヌ、1642年5月10日

マザラン枢機教とシャヴィニー殿は月曜日に、この地でまさに皆を心配させたあの病から王が快復されたことをお喜びに前線の方へ出かけられました。私もご一緒しまして、木曜の夜まで戻りませんでした。そこでペルピニャンを望みながらこの世でもっとも美しい場所の一つを見ました。王はまもなくそこをお手に入れられるでしょう。これらの方々と左馬頭のところで食事をとっておりますと、士官が二人その場所からやってきまして、左馬頭に会いました。左馬頭は彼らを食卓に着かせ、食後彼らの申し出を聞かれました。彼らは、彼らをスペインに送ってくれるように、そのために包囲が始まってから30日の余裕を、ただ10日間は返事をしないままであったので20日で満足するが、と要求しておりました。彼らに救援が来なかった場合は、しばらく後に降伏すると妥結しないのなら、王はもう彼らにそのようなことを許すお心持ちではいらっしゃらない、と左馬頭は答えました。マザラン枢機教はおととい、彼らがしばらく後に降伏することを一週間後には妥結すると賭けられました。私はといえばそんなに早くその場所を手に入れられるのかどうか信じがたい所ですし、そんなに安く手に入れると期待しているととんだ計算違いをするのではないかと心配しています。[中略]ありがたいことに王は非常に美しくいらっしゃいます。枢機卿[リシュリユー]の腕に何か(腫瘍)が再発したようです。またちょっとした切開をしなければなるまいとジュイッフ(Jean Juif)医師は考えております。シトワ(Citois)医師は同意ではありません。これについては決断しているところです。幸いなことに全く危険ではないようです。自分が出発するしばらく前にあなたが食事と呼んでくださるのではと期待していたあの方[サン＝マール]が、自分の主人[ルイ13世]とではなく、他の方[リシュリユー]と旨くいっていないという噂が流れています。それらしい様子がないでもありません。[中略]でも[これらの国事よりも] * * * 通りのほんの小さなニュースの方がもっと価値があります。長々とお引き留めして申し訳ありません、云々。(UBICINI, I, p.375-376.)

リシュリユーの病気については、医者意見の対立にも拘わらず何ら危険なことではない、と遠方を心配させない配慮を見せるヴォワチュールが、サン＝マールとリシュリユーとの不和に関しては、名前を伏せながらも言葉を和らげずに言及する。サン＝マールの周辺の不穏な空気は明白だったのだろう。また「主

人とではなく他の人と」というこの思わせぶりの筆は、ルイ13世との不和も想像させないだろうか。

王との不和に突発事が重なる。

リシュリューはこの時期、海の風が体に良くないということでナルボンヌからタラスコンに引きこもっていた。カタロニアの副王であったブレゼ元帥²⁶⁾がタラスコンにいたリシュリューのもとへ、船が難破してガストン・ドルレアンとスペインの間の密約の証拠が見つかったという知らせを送った²⁷⁾。

6月11日リシュリューは秘書のシャルパンティエ (Deny Charpentier) に複写させシャヴィニーをタラスコンに呼び寄せる。シャヴィニーに「王は(手紙は)偽物だ、と言うだろうが、釈放するのは簡単だが、敵が攻め入ってきた後に手当をするのは難しいので、と用心のために左馬頭を逮捕するように提案せよ。」と言い聞かせた²⁸⁾。

また、「ルイ13世」の項では、シャヴィニーが陰謀の証拠として、間違いだらけの偽造された密約を枢機卿のもとにもたらしたとある²⁹⁾。

もっともタルマン・デ・レオは、船の難破と発見された密約の話は当時流れていた噂であり、真実ではないとしている。陰謀の発覚は、密約が偶然に見つかったからではないだろう。度重なる陰謀や反乱を乗り越えてきたリシュリューは、当然その情報網で事前に情報をつかんでいたのだろう。ヴィニーは、リシュリューの出没自在のスパイとしてカプチン修道士を登場させるが、現実には密告によるのだろう。タルマン・デ・レオによると、ヴォワチュールはその密告者を、ルイ13世妃アンヌ＝ドートリッシュではないかと推測したという。

密約を得るために取られた手段についての真実は明らかにされていない。ファベールは、故王はシャヴィニーやノワイエと同様に知っていた、そしてこれ以外に知っているのは、王妃、王弟殿下、マザラン枢機卿、それに自分自身だけだが、自分は決してそれを言わないだろうと言っていた。ある時誰かがコンデ大公にどういった仕掛けで密約が見つかった

26) Urbain de Maillé, marquis puis maréchal de Brézé リシュリューの姉妹と結婚した義理の兄弟で、先に出た Jean Armand de Maillé-Brézé の父。

27) TALLEMANT DES REAUX, I, p.282.

28) *ibid.*, p.283.

29) *ibid.*, p.349

のか尋ね、大公が小声で何かを言っているのを見たヴォワチュールはシャヴィニーに、「この秘密をご存じない振りをしていらっしゃいますが、大公は某氏に話していらっしゃいますよ」と言うと、シャヴィニーは、「大公はご存じないし、ご存じだったら、あえておっしゃることはないだろう。」と答えた。このことからヴォワチュールは、これは王妃からもたらされたのだろう、と推測している。その証拠としては、女王からお子たちを取り上げようと言うことが長いこと話されていたのに、急に沙汰やみになったことに気づかされる。(TALLEMANT DES REAUX, I, p.284)

翌6月12日シャヴィニーはナルボンヌにいた王のもとに伺候し、サン＝マールを引き下गरせて王と一対一で話す。シャヴィニーは王にサン＝マールの逮捕を決心させ、その夕逮捕状が出された。冒頭のヴォワチュールの書簡にあるように、サン＝マールとド・トゥはナルボンヌの城壁から逃れきれず翌日6月13日逮捕される。

逮捕の様子はヴォワチュールの書簡がもっとも詳しいが、タルマン・デ・レオも逮捕劇の様子を伝える。

左馬頭は逃げるのが遅すぎたのである。彼はナルボンヌで、とある人物の家に逃げていた。その家の娘が彼の小姓の Balet とよろしくやっていて、彼を案内したのであった。この娘の父親というのは老いた平民で、外出することは全くなかったのだが、この男がミサに行って、左馬頭がどこにいるかみつけたものは誰でも褒賞を受けるだろうし、匿うことは死刑で禁ずると鳴り物入りで叫んでいるのを聞くまで、サン＝マールは24時間も前からその家に隠れていた。「おや、これはわしらのうちにいるあの男ではないか、どうなっとるんだ」と思った。こうして哀れな左馬頭は逮捕されたのである。(ibid., p.348.)

サン＝マールは町人の家に隠れていた。夜、手の者に、「町の門がどれかたまたま開いていないか調べて来るように」と言った。小姓は調べに行くのをおろそかにした、というのはいつも早くに閉めることに注意が払われていたからである。しかしなんたる不幸なことか、この夜はラ・メイユレイ元帥の輜重隊を入れるために一晩中開いている門が一つがあったのである。家の主人が見つけて罰を科せられることを恐れて申し出

た。(ibid., p.349)

処 刑

ヴィニーの描くサン＝マールは、英雄的に振る舞い、スペインに逃れる手段をあえて執ろうとしないのだが、事実はどうだろう。ナルボンヌの城壁内の王の宿所から隠れて、逮捕まで一日かかっているわけだから、それほどいさぎよいようにも思えない。といって特にスペインへ亡命することを考えていたわけでもないようである。

「フォントライユは王が、左馬頭を呼び寄せずに、ノワイエ氏とシャヴィニー氏と長く話し合っているのを見たので言った「左馬頭殿、そろそろ引き上げ時でしょう。」左馬頭はそうしなかったもので、「君は肩の上から頭を取られても十分に立派な体格だが、本当の話、私は小さすぎるのですね。」と言った。そしてスペインに密約を結びに行くときのように、カプチン修道僧の姿をして逃れた³⁰⁾。

サン＝マールが必死に逃げようとしなかったのはなぜだろう。ヴィニーの描くような英雄的な人物であったからかもしれないが、むしろ、逃げ出さなくとも生き抜ける目算があったからではないか。王の寵愛とリシュリューの健康状態から、ルイ13世がサン＝マールを死なせるに忍べず追放程度の刑であり、その間にリシュリューが亡くなって刑はうやむやになるだろうと楽観し自白する³¹⁾。

大法官殿は左馬頭に、王は君を失うには君を愛しすぎていらっしゃる、しばらくのあいだ牢に繋がれるだけだろう、陛下は君の若さを考慮なさるだろう、と言ったので、左馬頭はその言葉のいくばくかを信じ、自白した。(ibid., p.285)

サン＝マールと同時にナルボンヌで逮捕されたド・トゥはスペインとの密約には同意していなかった。しかし混乱して振る舞っており、あらゆる陰謀の痕跡が発見されたという³²⁾。裁判引き延ばしの方策を採ることもなくサン＝マール

30) *ibid.*, p.283. 参照。「ルイ13世」の項 (*ibid.*, p.349.) ではフォントライユはその一週間前にはすでにスペインに逃亡していたという。

31) *ibid.*, p.350.

32) *loc. cit.*

ルと運命をともにする。

つい1年前にルイ13世に死を免じられたばかりのブイヨン公爵は、リヨンでマザラン (Mazarin) が「あなた方の密約は暴かれた」といって密約の何行かをそらんじてみせると、驚いて、ガストン・ドルレアンが自白したのだと思い、命を保証されてすべてを話した³³⁾。この人物はもう一度命を長らえるが、今回は領地のスダン大公領を没収されてしまう。

ガストン・ドルレアンはかつてモンモランシーを見捨てたように、ここでも独り難を逃れる。ブルボン地方にいた王弟殿下は、サン＝マール逮捕の報に接してオーヴェルニュの山中に逃げ込み、腹心のラ・リヴィエールを王と枢機卿のもとへ送り自身の安全が確保されるまで出てこなかった。

タルマン・デ・レオによると、謀議のもう一人の黒幕は、後のポーランド王妃ルイーズ＝マリ・ド・ゴンザーグであった。ヴィニーは可憐な女性として描いたが、タルマン・デ・レオの評価は厳しい。「公女は美しく、当時妻を亡くして一人だった王弟殿下は彼女に恋をした。(中略)公女は左馬頭と、枢機卿を追い払い、ことが成ると左馬頭が宰相になり結婚することを考えて陰謀を巡らした。」(*ibid.*, p.584-585.) サン＝マールの手元にこの女性からの多くの手紙が残されていたようだが、陰謀に関わるものなのか、私的な交情によるものなのか。

サン＝マールが逮捕されたということは、公女にはパリの誰もが知らないうちに知らされていた。そして非常に当惑した。というのは左馬頭は驚くほどの量の公女からの手紙を持っていたからである。そこで親しかったランブイエ夫人に来てくれるように使いを送り、落胆を物語って、エギヨン夫人³⁴⁾に取りなしを頼んだ。町外れ [の普段住んでいるリュクサンブール宮殿] では誘拐されるかもしれないという意見によってパレ・ロワイヤルに引きこもっていたエギヨン公爵夫人に、その夜から会いに行くべく、[パレ・ロワイヤルの近所の] ランブイエ邸を訪れた。ランブイエ夫人はこれほど遺憾なものは見たことがないと言っている。エギヨン公夫人はこれ以上ないほどにもてなし彼女の手紙をすべて返した。この件に関して、ルシヨン軍経理官であるデ・ジヴトー (Hercule des Yveteaux) 氏が左馬頭の小箱を開けようとする、小姓が「そこにはお探しのものはございません、女性からの手紙だけです」と言ったと伝え

33) *ibid.*, p.349.

34) Marie Magdelaine de Vignerot, dame de Combalet, duchesse d'Aiguillons、リシュリューの姪である。

られている。(ibid., p.585.)

こうして窮地を脱したこの女性は、1645年ポーランド王 Wladislas 4 世に嫁す。さらに夫の死後その弟 Jean-Casimir に乗り換えて、王妃の冠を戴き続ける。

結局処刑されたのは、後ろ盾を失ったサン＝マールと、優柔不断さから事件に巻き込まれ、拙さから死刑判決にまで巻き込まれたド・トゥの二人である。二人はグルノーブルの法院で裁かれた後、9月12日、リヨンで斬首される。

判決が下された。これほど過酷で思いがけないことがらにも驚きを見せなかった。彼は雄々しく死んだ。長広舌をふるうこともなく、窓の見知った人に挨拶しただけだった。執行人が髪の毛を切ろうとしたときはさみを取り上げてイエズス会の神父に渡し、後ろを少し切るように言った、残りは前に掻き上げたのである。また目隠しもされたがらなかった。目を見開き断頭台をしっかりとつかんでおり、引き離すのに苦労したほどである。頭は一発で落ちた。(ibid., p.351)

そ の 後

この事件に主人ガストン・ドルレアンが関与していることをヴォワチュールは知らなかった。サン＝マール逮捕の模様を詳しく書き送り、「他の人たちがこの不幸に巻き込まれはしないかと心配しています」と書いた時には自分も巻き込まれると薄々と感じていたのか、それとも他人事だと高をくくっていたのか。7月3日にはガストン・ドルレアンの関与を知って動転した手紙を書いている。

ランブイエ嬢宛て (未刊)

モンテリマール発、1642年7月3日

拝啓

殿下は破滅です、そしてその家臣たちも私の見るところ、間違いなく確かな滅亡です。私の精神がどんな状態にあるか、私がこの世でもっとも不幸な男であるかどうかご判断ください。もし運命があなたにお目にかかるという喜びを残してくれていなければ、私は全く運から離れて

しまったことになっていたでしょう。運命はおこりうる中で最も奇妙で不吉な冒険でその喜びを乱しに訪れたのです。いずれ戻るのだという喜びを想像することだけが、私をこの旅の不便さに耐えさせたのです。でもその後で、来た時よりずっと悲しく戻らなければならないのです。この悲嘆の中ではどんな方向を向いてもいかなる慰めも見当りません。というのは、他のどんな不幸においても慰めになってくれたであろう、あなたの御友情という名誉さえ、私をずっと感じやすくしているのですから。私の残りの半生をあなたにお目にかからずに過ごすのだと私を脅かしている不運に対して、覚悟ができないのです。こんな悲しみの中で、シャヴィニー氏の友情から、私が期待できるかぎりの援助と、私の不幸は最悪のそれではないだろうという大きな保証を受け取りました。でも私は惨めでなくはありえないように思えますし、最も破滅的なもの以外の取るべき決心があるようには思えません。私たちはすぐにパリに向かいます。多分ここで語られるところによると、今月の19日か20日に着くでしょう。したがって、間もなくあなたにお目にかかるという栄誉を持てるだろうと望んでいます。そしてどんな遠くの未来に目を向けても、それが私が見ることのできる唯一の喜びのきらめきなのです。明らかにされた事柄に驚かれるでしょう。私たちは奇妙で哀れなことを見ることでしょう。殿下にはとても奇妙で耐えるのがとても辛いことが申し入れられました。ですからきっと殿下は提案された和解案を、それが和解と呼べればですが、お受けにはならないだろうと思います。お願いですからこの手紙をあなたのお宅の方以外の誰にもお見せになりませんように。(UBICINI, I, p.392-393.)

幸い王弟殿下はお咎め無し、ということでヴォワチュールも旧来の生活を確保する。

リシュリューも永くは生きられなかった。この年の12月4日パリで亡くなる。ルイ13世は、亡くなる直前の枢機卿に会いに行き、病が非常に篤いのをみて、大変陽気そうに退出したという。(TALLEMANT DES REAUX, I, p.289.)

ルイ13世は寵臣の死を悲しまなかったようである。王はジャムを作る小鍋を見て「サン＝マールの心はこの小鍋のケツより黒かった。」と言ったという³⁵⁾。

35) *ibid.*, p.281.

ルイ13世もこの後そうは永くなかった。1643年2月に発病して以来、体は衰え、春には死の床に就いた。晩年は非常に迷信深くなっていた。ある時、聖遺物を探し出す才能を持った信心者の話を聞かされたが、不信心で才気のある廷臣が「私だったらブルゴーニュに連れて行ってトリュフを探させますな」と冗談を言ったのを怒って追い出したという。³⁶⁾

リシュリユーに遅れること半年、翌1643年5月14日に崩ずる。

サン＝マールたちが囲んだペルピニャンは飢えに苦しみ、1642年9月9日フランス軍の手に落ちる。1659年11月7日、25年に及ぶフランスとスペインの戦争状態を終結させたピレネーの和議が成り、この町のフランスへの帰属が確定する。

(1998年9月14日)

書 誌

LEGRAND, Jacques (sous la direction de), *Chronique de la France et des Français*, Paris, Larousse-Jacques Legrand S.A., 1987.

FURETIERE, Antoine, *Le Dictionnaire Universel d'Antoine Furetière*, Préface de Pierre Bayle, illustré par Callot, Abraham Boss et les plus grands graveurs du XVII^e siècle, choisis par Claude Helft, Paris, Robert, 1984.
(Paris, Arnout et Reinier Leers, 1690. に解説を加えた版)

Grand Dictionnaire Encyclopédique Larousse, Paris, Larousse, 1982.
(G. D. E. L.)

MAGNE, Emile, *Voiture et l'Hôtel de Rambouillet, les années de gloire (1635-1648)*, Paris, Emile-Paul Frères, 1930. (Nouvelle édition)

MOUSNIER, Roland, *Les institutions de la France sous la monarchie absolue 1598-1789*, tome 2, 2^e édition, Paris, P.U.F., 1992.

TALLEMANT DES REAUX, Gédéon, *Les Historiettes*, Paris, Balland, 1986.
(1862年の Monmerqué と Paulin による版の抄録版)

TALLEMANT DES REAUX, Gédéon, *Les Historiettes*, I et II, édité par Antoine ADAM., Paris, Gallimard (Pléiade), 1990.

VIGNY, Alfred de, *Cinq-Mars*, préface de Pierre Gascar, Paris, Gallimard

36) *ibid.*, p.352-353.

(Folio), 1992.

VOITURE, Vincent, *Poésies*, édition critique publiée par Henri LAFAY, 2 vols, Paris, Librairie Marcel Didier, 1971.

VOITURE, Vincent, *Œuvres de Voiture, lettres et poésies*, nouvelle édition revue en partie sur le manuscrit de Conrart, corrigée et augmentée de lettres et pièces inédites, avec le Commentaire de Tallemant des Réaux, des éclaircissements et notes par M. A. UBICINI, 2 vols, Genève (Paris), Slatkine, 1967. (1855年版の復刻版)

ヴィニー (松下和則訳)、「サン＝マール」、『世界文学全集18、ヴィニー・ミュッセ集』所収、筑摩書房、1970年

田島俊郎、「ヴォワチュールのスペイン、アフリカ旅行」、『徳島大学教養部紀要 (外国語・外国文学)』第1巻所収、1990年

田島俊郎、「ヴォワチュールのロンド注解」、『徳島大学教養部紀要 (外国語・外国文学)』第4巻所収、1993年